

震災遺構保存の意義について

当会議で検討していただく震災遺構

以下の3項目に当てはまるもの

- 被災の痕跡を残す構造物・建築物（必要に応じ地形、地層等も含む）
- 鎮魂，後世に向けて防災・減災に役立つもの
- 原則として，被災の痕跡を一定程度残した状態で現地保存されるもの

震災遺構保存の意義（震災遺構の役割）

①鎮魂

震災遺構は、被災時の状況や人々の体験・記憶など、それぞれが様々な背景を持っており、震災遺構に対して人々が抱く思いも様々である。

しかし、犠牲となられた人々を悼む気持ちや、「悲劇を繰り返さない」、「震災の記憶を風化させない」という思いは、多くの人々に共通するものであると思われ、震災遺構が、自ずとそうした祈りの場となっていくこともある。

このようなことから、震災遺構を通じて、震災で失われた人命の尊さ、被害を最小限に食い止める努力、復旧・復興に向かう姿勢など、見る人がそれぞれ震災について考え、長く記憶にとどめ続けることは、鎮魂につながるものであると考える。（鎮魂）

②災害文化の伝承

大津波による被災の痕跡が形あるものとして残されることで、震災時の津波の大きさや破壊力が強く印象付けられ（破壊力の痕跡）、長く伝えられていくものとなり得る。地域の人々にとっては、津波の威力とともに、震災時の体験や出来事なども合わせて想起させる存在となり、そこから様々な教訓を引き出し、学び合う場ともなり得る（教訓）ものである。

このように、震災遺構には、津波の恐ろしさを伝え、類似災害が発生した場合にどう対処すべきかを、地域において日常的に思い起こし語り継ぐことを促す役割があるといえる。

③地域を越えたメッセージ性と次世代への継承

震災の経験や教訓は、被災地だけでなく、他の地域の人々にも広く共有され、後世に継承されていくことが極めて重要である。震災の被害状況等を目に見える形で残すこと（破壊力の痕跡）により、津波の破壊力と防災・減災対策の重要性などの教訓（教訓）を、震災を経験していない人々にも発信し、強く訴えかける（発信力）ことができる。

このことから、震災遺構には、被災地以外の地域や次世代の人々も含めた幅広い対象に、震災の脅威や教訓を伝え、防災・減災意識の醸成を促す役割があるといえる。